

友林蘇岐

(一)



謹白

特に各小學校に御依頼申

謹啓各位益々御多御精勵之段奉大賀候陳者當校々友會編輯に係る岐蘇林友は當校と共に岐蘇美林の中に生れ聊か林業の知識と實益とに向けて研究を積み併せて林業の趣味を鼓吹せんと存じ月々發刊致居る次第に御座候借目今公有林野の整理並に之が經營等は誠に當面の一大緊要事に有之一日も忽にすべからざる事と存候而して之等の事業は固より専門の知識と經驗とを要するは勿論之が研究修養に關しては一般町村の青年に向けて猛省を促して止まざる處に御座候本誌は元より片々たるもの青年諸君子の渴望を慰するに足らず候へ共幾分研究參考の資料とも相成候は幸甚に有之候右様に微意を以て毎月御送附可申上候間御清覽煩度尙御手数恐入候へ共一部は貴町村役場へ一部は青年會へ便宜御配付被成下度此段特に及御依頼候也

學術

ワシントン府の記念樹

七宮生

我國に於ても嘗ては御手植或は何々紀念樹と稱して盛んに植樹し諸處の公園及庭園を飾り訪問者の興味を深からしめし現今に於ては責任重大保護困難等の口實の下に可成避けんとする傾向なきか今ワシントンの記念樹と題し亞米利加森林雜誌に掲載せるものを拙譯し聊か參考に供せんとす

各國に紀念樹あり非常に尊重愛護し是れに關する口碑傳説を蒐集し國民をして古代偉人の記憶を喚起せしむ歐洲及亞細亞の都市公園にありては是等紀念樹の數實に豊富なるも合衆國にありては比較的少なし是れ國民崇拜心の欠乏に因るにあらずして實に建國以來日向は淺きが故なり然れどもワシントン府公園及諸庭園にありては歴史的趣味を樹木に結び付けし故著名なるもの頗る多きも札を附せざるを以て普通觀光客にして

明治四十四年十二月二十三日印刷
明治四十四年十二月二十五日發行
編纂發行人
長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地
定價三錢

安井正夫
長野縣松本市木町百八拾四番地
印刷者 兔澤忠雄
印刷所 交文社
全縣全市全
發行所 蘆澤書店
長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地

- 本誌目次
- 謹白 特に各小學校に御依頼申上候
- 學術 ワシントン府の記念樹、一樹(木)木曾の紅葉、食物に就きて、枕木の木取法
- 通信 佛部便り(其三)
- 文苑 樂屋ものがたり
- 附錄 山林學校便り、修學旅行日誌

是等に注目するもの極めて稀なり是れ年々ワシントン府に來る多數の訪問客中には常に多少の紀念物探究客なるものを有す是等探究客は直ちに小刀にて樹木の札を破壊するを以て札を附せざるを例とす而して公園には公園監督人なるものありて紀念樹の位置は勿論植栽に關する事實をも熟知し訪問客に對して説明の勞をとると云ふ(亞米利加は最も公德の重んぜらるる國と聞く然るに斯る事實を而かも米國雜誌に見實に意外の感あり)

植物園には國史上傑出せる人々の紀念として數多の樹木植栽せらるる則ち大温室の南方入口附近歩道線にあるアカシアの木はガールフォールド大統領の紀念祭の際植栽せしものにして其向側にあるアカシアの木は故アルバート・バイク將軍の紀念樹なり又東門南部には千八百六十三年ケンタッキー州の前元老院議員クリッテンデン氏の植栽せし櫛あり本道及第二道路間の温室南方には珍奇なる歴史を有する支那櫛あり其由来は數年前故チャールズ・ア、ダナ氏の一友人が支那旅行中孔夫子の墓地を陰蔽せる一樹下よ

數個の櫛實を拾集し亞米利加に持ち歸り...

東方芝生にルーズヴェルト及秘書官ヒッチ...

上にして實に同公園中最高なる裝飾樹とし...

山高雄攝津の箕面にして大和紀州には少し...

交通の便開けて以來木曾も亦日々社會に...

云へば蛋白質に屬すべき物質で一定の温度...

食物に就きて

吾人がトロ、飯で飯鉢を叩へて満腹した時...

生

一樹一木 (其八)

木曾の紅葉 小松吉次郎

紅葉はモミヂと訓してモミ出ツルの義なり...

ては非常好んで食後等に食する必須のもの
如くに思つてゐるのであります勿論西洋
人は我國等と比較して肉食が盛んな國で有
ります勢へ其食する傾向を有する爲め自然
に左様に習慣を呈して來てゐるので有る
かも知れませんが其の故に彼等は誠にトマ
トの有る家には胃病が無いと云ふてゐるのも
一方から見ると確かに一点理の有る事であ
ると思へます
以上述べました様に吾人の食物中には斯様
に消化を助ける酵素あるのを度外にして漸
次食物が黄濁になつて來て煮焼を行ふ様にな
つて却つて人為的に此の作用をゼロにな
して終つてゐるので其爲め或は胃弱だとか
胃病だとか或は腸が惡へとか云ふて高價
の代價を拂ふて消化剤を求めて服用する
云ふのは予盾も甚だしい事でありませぬ
新聞に大々的に廣告されてゐるタカヂヤ
クタイセとか柏木アスターセとか何んとか
名を揚げ其効能を書へてゐるのを非常に見
受けませぬこれは化學者が此の酵素と云ふ事
に先鞭を付けて此の酵素を旨く遊離して專
賣特許を得て旨く利を占めてゐるので有
ります故に酵素と云ふ事を知つて如何なるも
のに有し如何にして用ゆるかを知つてゐる
ならば大枚を出して藥師屋に忠義を盡す必
要が無いと思へます其故に常食物に注意し
て消化を助ける爲めに以上の様な大根オロ
シも宜しい又尤も多く澱粉酵素を有するも
のは麥芽で有ります麥芽とは大麥から飴を
作る中に適當の温濕を興へて發芽させたる
ものであります「ヂヤスターセ」を製する
は普通之れ或は米麴を粉細して作るの
であります夫れだから消化剤として之れを食
するのにも良へて又吾人が日常食する果物
の中にも澤山有してたりませぬ食後果物を食

つて胃を碎すよりは果物を食つて消化を助
ける方遙かに健康上宜しき事でありませぬ
洋人は日本人に比して肉食する事が非常
多いので其の爲め食後には必ず果物を食し
或は「サラダ」等の如き生野菜を食するの
で有ります之れは即ち食物中の酵素を尤も
有益に利用したるものと云はなければなら
ませぬ西洋の諺にも一日に一片の果物を食
すれば醫者は乞食となるか橙赤くなるか
醫者の顔青くなるか云ふてゐるのも畢竟果
物は消化を助けるものであると云ふのに過
きないもので有ります其他日本の例を取つて
生胡瓜を食すれば消化を助けるか又葱
等に日常之れを生食すれば皮膚の光澤を美
くし生理的作用を完全ならしむるか又血液
の循環を旺ならしむるかか神經を和げるか
か或胃の豫防に効があるとか胃の強壯劑で
ある等と云はるゝも要するに此葱の營養分
を其生葱の中にある酵素の作用を以て前
同様に有益に利用して食せる結果に過ぎな
いのであります

るばかりで無く實際其頃用へし道具着物を
見ても着物等は今の人が二人も這入つて餘
ると云ふ様なものも有ります又鏡等の重大
なるものを自由に着て戰場に奔走してたつ
たのを見れば少くも現時の人間よりは
優に一尺以上は確かに大きかつた事である
と思はれます例へ肉体的勞働が漸次精神的
勞働に傾へて來た爲め自然の法則として斯
様な傾向を呈してゐるとは雖へ共又一方其
健康の基礎たる食物の方より論ずると時代
を經るに従つて食物が黄濁になつて返つて
自然の大なる消化作用を有する酵素の作用
を度外にして來たのも確かに其因をな
してゐるかの如く思はれます即ち古い調理
の方法は幼稚で有るから煮焼も不完全で有
りたし又種々の動物肉でも其他植物でも生
食する機會は現今よりは確かに多かつたと思
はれます之れが偶然にも却つて消化を助
け体格を尤も頑丈に構成した云ふても強ち
誣言で無かるうかと思はれます吾人が動物
肉を斬身にして食するのと煮焼にして食す
るとの兩者が新鮮であつたならば生食にし
てやつた方が遙かに消化を助ける事が多い
ので有ります然し此處に一寸注意せんけれ
ばならんのは以上の如く生食主義で有
るか否か考へられませぬが勿論調理に於て
美味と云ふ事も考へる必要も有ります又
食物にありて條は虫の印が有るか其他の危
険物が混入する場合には是非相當の消毒を
行ふ爲め煮焼するのも是非必要である事を
忘れては成りませぬ
其他脚氣病等に就きても人間が黄濁になつ
て米が黒くて不味とか何んとか云ふて玄
米の精製に勉め一等米とか何んとか云ふ
て食してゐるものであるから折角玄米にあ
る立派なる營養分が精白せらるゝと同時に

失ふもので有るから其爲め脚氣を癩んでぶ
ら／＼してたり或は甚だしきに至ると
衝心して精米と情死する様な事に成るので
あるが脚氣の原因種々の原因に就き調査し
ておる様で鈴木梅太郎博士等は白米は無機
成分の欠乏によると云ふ結論をなしてゐる
又近頃新聞に出てたつたのを見ると遠山博
士は白米には筋肉末梢神經心臓の三機關の
要求する特異營養分たる銀皮酸と云ふ一種
の有機酸の欠乏であるとか云ふて半搗米を食
へとか金時赤豆が良ひとか稗粟が良ひとか
云ふてゐる
要するに危険でない限りは食物は生で食は
れるなら生で食へ菓子等を間食として胃を
悪しくするので果物の様なものを食ふて消
化を助けて消化器の健全を計り消化器の損
傷より來たる脚氣等に罹かる憂を少からし
め食物を余り贅澤にして却つて害を呈する
様な事は無へ様に云ふたのに過ぎないの
であります

枕木の木取法

枕木には一定の寸法あり之れを定尺とす今
左に之が範圍を述べし

- 一、枕木定尺
中六寸七分厚四寸六分長さ七尺
(甲)一等枕木
一、定尺より長二寸以内巾四寸以内厚四
分以内伸長のもの
二、灣曲は二寸五分以内(上下の灣曲は
除く)
三、角みは巾の一角若しくは兩角に於て
總長さ一寸七分以内
(イ)枕木は凡る皮付入皮割柄立枯大節死

節等なきものたるべし
(ロ)枕木は一挺採りにあらざるものに限
る
(ハ)枕木は二挺採りにあらざるものに限
る
(ニ)灣曲は三寸以内(上下灣曲除く)

Table with columns: 資材, 材積, 材積, 材積, 歩合, 品位, 單位, 價格. Includes a sub-table for '枕木製作収支計算表' with columns for 枕木資材生産枕, 未口徑, 木價格, 支出, 損益, 損益, 歩合, 損益, 損益.

尺九	五〇〇	四六〇	三五〇
尺八	五九〇	五〇〇	四〇〇
尺七	六〇〇	五七〇	三三〇
尺六	六〇〇	六〇〇	三〇〇
尺五	六〇〇	六〇〇	二七〇
尺四	六〇〇	六〇〇	二四〇
尺三	六〇〇	六〇〇	二一〇
尺二	六〇〇	六〇〇	一八〇
尺一	六〇〇	六〇〇	一五〇
尺〇	六〇〇	六〇〇	一二〇

備考前表は四十二年度の調査なれば現在木材價騰貴の場合に於ては多少の差あるを免れず前表より必然起るべき問題は丸太材の賣買と枕木としての賣買との所謂収支の比較之れなり第二表により之を示さんとす即ち第三表の支出は丸太材價格並に木挽賃運搬其他雜費とを含み但し枕木出來高二萬挺以上の事業なるを要す

通信

佛都便り 其三

◎信濃の四鏡只見る白雪燈々鐘容雲表に響ゆるを而して時は將に惠比壽講となり初冬の景氣を添ふ此地ニ光三尊の阿彌陀如來と共に人口に膾炙せるは今夕の大煙火會なり此を過ぐれば總て六花片々なるを聯想せしめ世に惠比壽講荒れと稱す僅か三月ばかり程を経たるが如く思はれし昨年此季より早や二ヶ年を過ぐ「月日に關守り」の諺は近年殊に痛切に感ず茲十日か程も経たらんには既に師走の月ともなるべし斯くして半生を過し又斯くの如き半生を迎ふ嗚呼又一層の奮闘努力なくして可ならんや

◎歴史は繰返すと云ふ京都鶴根の林業界に潤歩したる我運動界の怪物齊藤正雄君は上田小林區署に來り雞林八道を風靡せしや否やは知らざれども大に彼地に見知を著へたる兒野榮君は下高井郡に歸り九州男子の心膽を三寸の舌鋒に寒からしめ三浦靜岡の林業界を洞察せる杉本實君は小縣郡に轉じ而して曩に本署詰にして松本小林區署に二ヶ年を送れる中村豊治君は再び本署に歸任す之余が繰返されたる歴史の一として告げ度き所なり山海百數十里乃至數百里を隔てしもの再會は素より期せざりき八九年前には腕を扼して争ひたる野郎共今や社會の一員として職務に勉勵す之れこそ計らざりし處なり而して長野には原田森坂本野知里の諸君あり來るべき歳末年初の機に於て大に談せんが大に啓く所あるべきなり

◎余本縣に於ける木材消費額を調査し之れが供給備林設置の必要なるを絶叫せんが爲め資料とせんとし支障に遇ひて挫折す遺憾なること此上もなし依て茲に東京市に於ける電信電話の供給概要を知り得たれば記して以てせめてもの慰安とせん

す些々たる電信電話の柱にして尙屋つ然り況んや日々丁々の斧響と共に都市の内外發展擴張に用ひらるゝ木材の量に於てをや而して長野市の所要電柱材に關しては未だ調査せしものなく茲に記する能はざるは甚だ遺憾とする所なるも別に調査をなし以て一覽を請ふ事とすべし

◎余は先便約するに次便より本縣林行政に關する卑見を投せん事を以てせしも本件は少し思ふ所ありて暫く筆を擱く事とす希くは諒せられよ

の論説であつた事も少くない

文苑

樂屋物がたり

巡維の稱號を有した川上先生や尊徳宗の信者であつた西野先生が席を並べて居た時の樂屋は随分賑やかなものであつた、此二先生は元來恭仇であつた川上先生は殆ど毎晩のやうに西野先生を襲撃した翌日になると前夜交戦模様結果等が樂屋で公表される

「諸君、昨夜の結果を公表します」

の論説であつた事も少くない

は何の苦も知らず歩いて任舞つた川上先生は四月に去り西野先生は五月に去つた、殆ど時を全うして去つたのも或は何かの因縁かも知れぬ、今や二先生は或は異境に或は縣下に各々自己の目的に向て奮進努力されつゝあるが而し中夜人定まつた時或はある機会から不圖此山中の生活を想起し追憶する時定めし我知らず破顔微笑される事であらうと思ふ

學校記事

○第二回演說會 十一月二十二日午後零時四十分より講堂に於て第二回演說會を開催す研究雜誌部長木下君の開會の辭に繼ぎて登壇者續出し甚だ盛會なりし最後江畑校長より懇篤なる一場の訓辭希望等ありて閉會したるは實に午後五時なりき本日登壇者氏名及演題を掲ぐれば次の如し

- 亡者の大成功 瀧澤 正雄君
蠅と蜘蛛 羽豆太郎平君
三つの猿 家高 甚一君
智識を得る方法 酒井 光義君
所感 日野 清亮君
寶玉 花村男三郎君
教育論 喜多村 明君
文明と野蠻 塚田 大君
無用の用 藤枝 茂君
忍耐 神戶 利八君
夢と修養 久保田五良君
時は金なり 齊藤 海蔵君
酒は百毒の長 山本 真太君
所感 飯田 康雄君
博士と小使の話 千村 義雄君
人生と自然物 原 潔君
僅一錢五厘僅三錢で 下村 博君

諏訪湖紛擾の原因 吉澤 英雄君
苦境に處せ 村松 一清君
亡友を吊ふ 細江七兵衛君
讀書の必要 征矢野余所夫君
校友を戒む 角田 久福君
健康論 七宮 先生
労働に就て 北村 先生
○改名改稱 長野縣告示五〇三號に依り長野縣立甲種木曾山林學校を長野縣立木曾山林學校と改稱せられたり(十一月二十日發表)

○發火演習 十一月廿九日新開村七笑橋附近に於て發火演習を舉行す詳細は別項發火演習記事にあり
○十二月五日には第二學期試験時間割發表せらる即ち十四日に始まり廿一日終了す
○寄宿寮より
枯木立の淋しき眺め又一層の趣ある今日此頃朝な夕なに置く霜に爐邊の團圓は炭火の温みと共に暖かく樂しく相成り中候待たもせぬ第二學期試験もはや目の前に大手を擴げて待ちつゝあれば日一日と青イキ吐イキの徒多くなり只々此關門を通過して後の歸省を樂しみ勉學致し居り候鳥兎忽々去つて歸らす四十四年も余す所僅に二旬

○擊劍部大會
客月二十七日午後〇時四十分より當校雨天休換場に於て開會今井小林兩先生の審判の下に勝負を決し後小林先生の指導を受け午後四時三十分閉會す組別及勝負左の如し(○勝×負)

○發火演習記事

○小口直二	○伊藤昇一
○藤原進	○市岡正八
○原房藏	○下枝壽一
○長谷川増吉	○安藤清二
○稻葉豐二	○唐澤清見
○市川照人	○多田慶次郎
○久保義郎	○杉本之直
○小嶋義郎	○伊藤徳之丞
○成瀬幸吉	○伊藤昇一
○山本幸吉	○佐藤英一
○岩瀬幸吉	○伊藤昇一
○田中榮市	○中垣英一
○吉澤英雄	○喜多村明
○原田洋平	○上田彌太郎
○三尾新太郎	○飯田康雄
○小林秀一	○飯田康雄
○坂田勘太郎	○石曾根四郎
○三人拔 中垣英一、細江七兵衛	

江南に起りし風雲いよいよ暴れに暴れ擴つて太祖が「永久に」と築きし礎をも揺がさんす勢ひ昨は軍艦行くと云ひ今日は陸軍出兵すと聞く猛者ならず又壯士と許すべき程にあらざれども腕に聲ありて脾肉の嘆に堪へざるなり
此の時に當りて筑紫の野には大演習あり近く北信の野は師團の演習ありて参加すべく健腕聲あれども校命なきを如何にせん我々の健兒空しく腕を組んで北信濃の天を望み意氣天を衝くの概あり。發するによしなき英氣は只此の發火演習によりて漏らさるべしと思へば去年の其れに比して如何に壯觀を極むべきか殆んど想像に苦しむばかりなりいでや筆を呵して壯烈の狀を校友諸兄に報せんかな然れ共任器にあらず固より自在の

健筆を欠く到底諸君の満足を買はれ足らざるを憾む
昨夜の健兒の夢やいかなりしか夢破るれば此拾一月二十九日今日の演習を想ひつゝ布團を蹴立つて天を望めば黒雲暗鬱として天を蔽ひ晴るゝとも見へずまよふらば降れ風ふかばふけ我意氣は風雨の爲めには挫かれれど午前九時武裝いかめしく一同校庭に整列す一般方畧に曰く大形特務曹長の率ゆる北軍は宮之越方面へ退却中征矢野特務曹長南軍を以て追撃し七笑橋附近に於て合戦せんとす

北軍 小丸山に不利の戦闘を得て急ぎ宮の越方面に向けて退却し栗本を通過して七笑橋を破壊し木下西尾ト村各小隊をして北方河岸の森林中によらしめて迎撃せしむ時に斥候來り報じて曰く敵は正に此地を去る拾五町の所に在りと數分ならずして敵の斥候對岸に出没す
北軍愈々守備を嚴にしし敵寄せ來らば一擊全滅の計を廻らし満を持して未だ放たず折から銃聲一二發聞え始め續いて敵兵は七笑川を渡らんとす我小隊直に之を迎撃して此に戦闘は開かれ銃聲山谷に響きて物凄し敵兵機を得て川を渡りて突入せんとす我軍は豫て巧みたる事なれば敵を引き寄せん爲退却しぬ勝ちはこりたる敵兵は續いて吾に迫る我軍小丘に迎へ撃ちてこゝに又激戦は開かれ折から開ゆる休戦の命

南軍 稍北軍に後れて正々堂々校門を出で已にして栗本に達するに七笑川の橋梁は凡そ破壊せられたれば渡るに橋なし此に小羽根小隊長の率ゆる第二小隊角田小隊長の率ゆる第三小隊を人家の蔭に潜めしめ吉田分隊長の

率ゆる第一小隊は前進しぬ偶斥候來り報じて曰く「敵の歩兵約一小隊前面高地を占領して吾を迎撃せんとす」と進む事數町俄然響き渡る銃聲に戦の緒は開かれたり「すわ敵ござんたれ」いて來つて我が戦を受け今日こそ奮進猛撃彈丸のあらん限り刀劍の碎けん限り衝いて衝いて衝き崩さずんばやまず勢ひ實に勇ましかくて第一小隊は後援を得て七笑川を渡る我角田小羽根兩小隊は吉田第一小隊と相合して互に砲火を浴せかけたれば流石に頑強の敵も叶はずと思ひけん遂に退却す南軍之を追撃して茲に激戦開かれ彈丸雨飛劍々閃光の大修羅場を演出し遂に兩軍大突撃をなし劍戟相撃せんとせし時に休戦の命は下れり時將に午後二時に互に晝食をすませ中仙道に出で敵味方相擁して互に兵を談じ午後三時歩武堂々歸校し征矢野特務曹長より演習に付きての講評ありてこゝに全く終りつけぬ

附錄

修學旅行日誌

三年級編 (前號續)
五月廿六日 金曜、曇天
横須賀發東京泊

午前八時半三富ホテルを出で鎮守府前に集合某兵曹の案内にて一同整列して構内に入る構内の模様は之を一切筆にするを許さず一言其規模の宏大なるを作業の複雑なることを附記するに止めん軍艦相模を見る當鑑は三十七八年戦役の戦艦にして一萬三千四百〇六噸一同首を傾けつゝ説明を聞く本日は明日の海軍記念日に參列する爲めに港

内にあるは香取八雲外數艦なり小蒸氣にて横濱に到る横濱はもと狐啼の草深き小村なりしが大平洋より眞額に吹き付くる波の轟荒磯に引き止めてより今は内外汽船の喰ひ止め所となり全國の富は此港より分配せらるる様になりたり
神奈川縣藤原所在地にして林立せる船橋百貨輻輳する事本邦他に其比を見す加ふるに港灣其屈曲の度山丘の四面を圍繞せる水深土質良好なる他に比するなし市内を五區に分ち人口二十六萬稅關市役所各領事館水道局日本郵船會社東洋汽船會社米穀取引所正金銀行等巍然として街頭を壓す
二萬坪にも餘らんと思はるる茫々たる芝生の公園地にロンテニスベニスボールの技を闘はする外人を見更に外人の商館軒を連ぬる山下町を歩みては往年漁唱蟹歌の地と思はれす見物すること二時間半にして京濱電車によりて幕末時代嶋津藩士の英人を刺したる生麥其他幾多の驛次を打過きて花の都に着せしは午後六時神田郵便局前なる旭館に投す

五月二十七日 土曜、晴天
東京滞在目黒林業場視察
午前七時流谷驛より電車にて目黒に下車す十數町にして目黒林業試験所に達す農商務省林務局に屬す
試験科目
イ、化學的肥料
ロ、植物質肥料
ハ、人糞肥料
ニ、馬糞肥料
ホ、直接肥料(ナフタリン)
地下五寸位の二該藥品を攪拌し苗木を植栽す此惡臭はよく根部を犯す害虫を驅除し得べし
發芽 發芽を早むべき試験(爐)

發芽 發芽を早むべき試験(爐)
一、京都市

二、目黒式
播種 一、散播(散播に比し成績良好)
種子發芽を早むべき試験の方法は水湯水の三種に浸種し就中最も良好なる成績を表はすは湯に浸種したるものにして水に浸種したるもの最も不良なる成績を表はす
浸水期間は水にありては五日乃至一週間湯にありては五分間を最好適期間とす湯は勿論微温湯にして攝氏三十度の温度を保たしむるが爲に瓦斯管装置を設く
箭の收穫量に關して次の三方式による
一、京都式 年々露出するを放置し埋没することなく冬期馬糞堆肥を地上約五寸の高さに施肥し其上に土を見隠れに覆ふ方法にして年々高まり行きて地上に表は出る事遅く從て其形狀大なり九月頃に水糞少量を施す
二、目黒式 根の地上に表はるる六月頃に於て地面三尺位を掘り下げ露出したる根を埋没す而して九月頃に於て水糞少量を施すものなりとす本方法は京都式に優るに本敷を以てし劣るに總收穫量に於てす
三、無施肥なる方法にして其成績前二者に劣る視察し終りて後駒場なる農科大學林學科實科に向ふ途上廣潤なる路上に韓國觀光團に出會す此邊概して田舎蕭條の景に富み丘陵四邊に起伏し谷あり別墅あり座る昔の武藏野を想見せしむ此所多く試験期間に屬し其成績を聞くを得ず更に小石川向山御殿町の一群の林樹蒼蒼たる東京帝國大學理科學附屬の植物園を見る舊時幕府の樂園たりし處なり珍草多し
五月廿八日 日曜、晴天
地久節 東京滞在
本日は朝より自由行動を許可せらるる五時起床

床直ちに宮城に志す宮城は丘陵の平地に臨める所にして昔の江戸城を修築せるもの老松蒼鬱として四境を圍み斜に影を御漆の中に照し幾多の水禽靜かに其間に遊び聖代の太平を諡ふ宮城の正門なる二重橋は鐵と石とを以て墨築し其構造の壯麗なる自ら行人をして標を正さしむ目を擧ぐれば正殿豊明殿の瓦葺高く紫雲凝結たる間に日本の佳辰を奉祝せんとして參内する車馬輻輳として引きも切らず砥の如き大道を馳す胸間にかがやく勳章旭日に輝きて四邊まばゆく正門外一帶の芝生宛然として綠氈の如く楠公騎馬の銅像英風颯々として千載の下尙當年の威容壯烈を止む内閣宮内省の二官廳は門内にあり櫻田門外參謀本部陸軍省司法省大審院控訴院東京地方裁判所海軍省外務省ロシヤ公使館帝國議事堂を眺みつゞ日比谷公園に入る設計の妙泉石の美殊に音樂堂花壇の如きは異彩を放り勸業銀行華族會館等建物の大なるあり遙かに帝國ホテル府廳等屹立せるを見る夫れより九段坂を上りて舊式の燈臺を仰ぎ銃劍形の紀念碑の下を過ぎ靖國神社の招魂社に詣り別格官弊社にして社内數百株の櫻の植えられたるを見ては滿開の春を思はしむ右に向ひて遊就館に廣瀬中佐の遺物を見て當時の壯烈なる最後を偲び戦利品の軍旗砲銃の多きに驚し社前大村益次郎の銅像を見つゞ坂を下り神田に出で高等商業外國語學校法學院等を外望し電車にて淺草に向ふ雷門前に電車を捨てて人口に膾炙する所謂仲見世の商賈軒を連ぬる雜踏の人々にたされつゞ飛鳩陸續として相集まる仁王門を入り花屋敷雲閣パノラマ館さては江川の曲藝等に驚歎の目を張る公園地一帶に興業物多くして樂器耳を聳せんばかりなりこれより更に電車の便をかゝりて高輪の

松杉四境を封じ香火の烟縷々たる泉岳寺に四十七士の義烈を吊いて飯途に就く折しも皇太子殿下の御通過せらるるを計らず遠拜す宿に飯れば既に八時を過ぐ電車の響を聞きつゞ夕食を喫し髪に就く
五月廿九日 月曜、曇後雨
東京發日光泊
午前五時上野驛に參集す日光行には尙約二時間の暇を有す依て老樹に富み風景に富み古跡に富む上野公園に散策す、寛永寺の巨刹家康の靈に參拜し附近の彰義隊戰死者の墳墓を吊ひ、東照宮廟の南にある黒門に印せられたる無数の彈痕を見ては當年戰亂の劇甚なるを偲び西郷南州翁の銅像を仰ぎては勤王黨第一の名將の面影を偲ぶ更に清泉を迂迴して新聞閱覽所に久しく相見ざる懐しき信毎新聞を手にす
六時半ともなりたれば直ちに停車場へ引き返し六時四十五分並に花の都を辭して日光に向ふ、當地附近田植歌長閑に亦禪甲斐甲斐しき田植女を見る福島にては稻苗僅かに三寸に満たざりしに、氣候の差を見るべし十數の驛次を過ぎ小山雀の宮宇都の宮を過ぎて鹿沼今市を過ぎて古杉樹茂れる日光停車場に着せしは十二時なり、兩側の夥しき旅籠より御休御泊と五月蠅云ふを他所に見つゞ十町程を上り神橋に程遠からぬ神山旅館と云ふ瀟灑なる旅舎に入り荷物を托し置き直ちに日光の結構を見んとす
二三町にして大谷川に架せる神橋に達す是れに對せる普通一般人の通行する橋を渡る神橋は其の古風なる朱塗の影を激流たさまりて深淵なせるに驚す、其昔僧勝道が初めて登山せし時に山神こゝに靈異を示したりと云ふローマンチックの傳説を聞きつゞ晝尙暗き古杉道に影を落せる長坂を昇りて觀

然として登ゆる石造の大華表の前に出づ之を過ぎ黒田長政の獻納したる石の華表の後ろし西に五重塔を望み東門の石階を上る、殿堂の金碧は一步毎に燦として目を奪ひ人をして應接し遠なからしむ松及猿猴の着色彫刻ある廊御手洗石磐唐銅鳥居及鐵燈籠は南部侯が領下の民三年間の苦しみによりて獻じたるものなりとか朝鮮獻納の廻燈籠等を見て更に陽明門數歩のうちに輝やくを見れる金の大鈴をかゝり柱を楓の白木にて造れる十二本の圓柱内に鳥獸草花を彫刻す其の一柱地紋の渦流下に向ひたるは魔除の爲めに殊更に作ると云ふ天井の昇龍降龍皆狩野探幽守信の筆なり次に唐門の屋根に唐銅にて造りたる恙虫を見る息をも吐かず暗誦せるを讀上ぐるが如き案内者の説明は一々記憶に止まるべくもあらず
金光四邊に映する拜殿に跪座一拜の後奥の院に向ふ入口に猫門あり左甚五郎の作なりと傳ふる眠猫の彫刻あり門をくゞり約二町の石階を上れば奥社あり外部銅板も悉く包み正面に唐銅の華表を立つ寶塔一坏の土中徳川家康の魂魄は眠れる也
御廟を出で松樹間を穿つこと一町許りにして大己貴命を祀れる二荒山神社に參拜す實に千餘年間を閑したる古社なり、折しも白雨颯と落ち來れるに凌ぐべき具付宿にたきたり上衣もゾボンもかけがへなきを如何せん附近の名物賣る店に飛び込みて雨凌ぎがてら名物土産など思ひ思ひに購ひて小降を待ち宿に歸る附近一帯の地松本侯の獻せしと云ふ古杉天を排して立ち盡々たる老幹一本よく數百金に價するものあり昔時にして尙林業の後世に利をなすの大なるを知る鑑識の明なる敬服の至りなり、現今此の地に

於ける枝打の方法は枝を極めて上方よりたろし幹の上部纔に少許の枝葉を残し置くのみ
五月三十日 火曜、雨天
日光發足尾間藤泊
午前六時神山旅館を發し電車鐵道の便を取りて東照宮前清瀧觀音清瀧所附近を過ぐ現存の終点岩げ鼻に下車し是れより徒歩にて中禪寺に向ふ雨中泥濘深くして殊に足を重からしめ困却を極む途上早中健兒など路傍の岩にチヨクもて書かれ未だ消えざるを見れば早稲田中學校の諸氏も此地を近き中に過ぎたるなるべし新道の紆餘曲折したるを登りつゞれば華嚴の瀑布を指す大平に出づ、此邊林相地と趣を異にし樺、山毛櫸、等の路傍に疎立せる其深山たるを知るべし
華嚴瀑布は中禪寺湖の水の落ち口にして深谷の中に懸り高さ七十五丈蜿蜒たる坂路を下りて樹林を穿ち山腹に到り瀧壺を望めば中に龍の住み居らんかと思はる、潭をなし熔岩もて形成せられたる斷崖を猛烈なる勢もて奔注する無數の小瀑布は水晶簾の如し中以下は散じて飛沫となり煙の如き霧となる瀑見茶屋に一憩荒涼寂莫たる大平を行く事三町餘にして青き湖の水を疎林中より望むを得べし
湖水の清波翠微をひたし金髮明眸の逍遙せるを見つゞ波打際茶屋に中食を認め雨暫らくと絶えたれば小舟に竿さして足尾に向ふ舷を叩いて朗かに詩吟するもの急造の竿に糸を垂るるあり魚は澄みし水に其背をチラチラと見すれども釣人つたなきにや遠來の大公望をして徒に失望せしめしのみ
湖心に出づれば惜むべし瀧四邊に擴がりて四邊の佳景見るを得ざるを程なく對岸に着

雨亦いたりたれば雨具に身をひらめ濡るゝをこねて進むやがて八町時にかゝる小篠まじりの疎林を辿りつゞ幾度か躊躇し進むに程なく其頂上に達す晴天ならば足尾の山望見すべしと言ふも篠突く猛雨は一聞先も見え分かず硫黄の香鼻をつくに足尾銅山の近きを知る下りにかゝれば滿山一木の存するなく赭色の素肌を露出せる山態は其の鐵毒の大なるを表はす小石交りの泥濘を没するばかり、峠を下り溪流に沿ふて歩む事三里餘にしてトロツコノ響四邊に反響し硫黄一入幽鬱不快を感じ所々骨立てる小山附近に坑夫小屋の点在せる間遠町に着し朽木館に投宿す
足尾は日光の西南に位し渡瀨の源流帯の如く流るゝを前にす、鑛山は其の規模の宏大なる製鋼の多額なることによりて本邦第一と稱せらる、周圍六里坑夫の總數二万開鑿せる坑數々百に及ぶ鑛石を運搬するに上州大間々より鐵道馬車通し御子柴細尾の二嶺巨大なる鐵索を以て其便に供す渡良瀨川は足尾より發、花輪を経て上野の平野に流出す往時鑛石屑を投入せしにより其害毒殊に甚だしく一尾の魚をも見ざりしと云ふ、沿岸民の被る害毒も亦甚大なりしにより近時大いに沿岸民の反感を買ふ所となりたりしも現今に至り種々なる方法を講じ其毒氣あるものを除去去り他へ埋没す而して煙毒に於ては殊に其方法につきて考慮する所にして精良なる石炭を燃料及鑛石に混じりて煙に硫氣なからしむ而して之が爲めに費す石炭の量莫大なるものなりと云ふ
五月卅一日 水曜、晴天
足尾間藤發大間々泊
午前七時宿を發し足尾銅山工業所に到る蘇

友林蘇岐

故出身原田氏來られ案内を受く同氏は職務多端の折々も不係割愛せられ種々なる便宜を計り給はりたり生等茲に深謝す 受付に至れば坑夫にして不慮の災により落命したるもの遺族或は創傷を被りて生れもつかぬ不具人となりたる者等に對して數多の人の同情を請ふと云ふを聞きて生等も應分の寄附をなす夫れより製鍊所を見て猛火身を焦さんばかりなる中に大なる入物に眞紅の椀銅はゆら／＼と波打ち器を傾くれば火の瀑布をなして流れタイブに入り之を冷縮せしむる装置に導く此處を辭し撰鍊所に至る水車に於けるが如く鑛石をつき碎きて其鑛分含有の多少を撰ぶなり

此處を出て坑内をくぐり小瀧を経て銀山平の製材所を見る規模大なると言ふべき程にあらず此地に於て鐵索運搬を見る鐵索運搬の此處に設けられあるはホドソン式一名玉村式と稱するものにして大小二種の設備あり該工場に於ける一ヶ月運搬材數三千本樹種は主として樅等なり再び小瀧に歸りて俱樂部と稱する坑内従業者唯一のバラダイズに於て晝食を喫し此足尾の地を辭し大間々に向ふ渡良瀬の沿岸御影石の岸石多く溪流の碧流と白碧相映し奇觀を賞しつつ岸に沿ふて神戸花輪の諸驛を経て午後九時大間々驛に着す

六月一日 木曜、晴天
大間々發妙義泊

午前七時宿を發し程遠からの停車場より七時十四分桐生行にて大間々驛を後にす桐生驛にて高崎線に乗替ふ一時間餘にして高崎驛に達す群馬縣内前橋市に亞ぐ繁華の地にして人煙稠密歩兵第十五聯隊の所在地にして兩尾線上野直江津に通するもの三線の分岐點なり更に茲にて直江津行に乗替へ飯塚安中煎餅に名高き磯邊を過ぎて松井田驛

下車す之より坦道を行く事一里にして妙義町に達す

松井田驛を距る十數町にして路傍杉の團生林を見る約七十年位のものにして林相も可なりに整ひ居れり林中伐採木に付て剝皮せるものあり方法等につき別に書くべき程の事もなし此の林中にて晝食を喫し十二時半妙義町養氣館に着す、當町は妙義山附近にあるを以て世人に知らるる山は町の西に屹立して白雲金洞金鶏の三峯に分たる山容奇峻怪峰を以て名あり少憩り後案内者を先頭に各自身輕々出て立ちて登る幾程もなくして老杉樹中の妙義神社前に出づ參拜し終りて登ること十數町一の華表を経て峻嶮を攀ち第一石門に達す巉岩峭拔削れるが如し登ること數十歩第二石門に至る其形長劍を立てたるが如く片月を懸けたるが如し第三第四の石門を經更に鐵梯の危きに登れば頂上に小祠あり之に詣て四邊の岩石の奇妙なるを見る危岩重疊せる中に一極目立つ巖削岩金鷄山の蠟燭若其他全山一として奇ならざるなく造化此處に奇を鍾め精を盡したり、驚心瞻目するのみ歸路葡萄園に果樹植栽せるを見養氣館に疲れし足を休む

六月二日 金曜、雨天後晴天
妙義發長野泊

午前七時妙義の山を後にして松井田驛に引き返し八時四十分當驛を發す
碓氷嶺の麓なる横川に着す汽車は此地に於て碓氷嶺を踰ゆる準備をなす此所よりアプト式の鐵軌を登り行けば程なく翠微眼前に迫り山色水聲遠く俗塵を隔つ此嶺は昔時關を置きし所景行帝の御宇日本尊命東征凱旋の時東望して橘姫を追慕せられし所二十六箇の隧造と數箇の煉瓦橋を過ぎて輕井澤驛に着す山間に熊の平と呼ぶ小停車場あり附

近楓樹多し輕井澤は避暑の好適地にして諸貴嶺の別裝多し兩宮の銅像を右手にながめつゝすゝみ程なく杏嶺驛に着す此所にて下車淺間山麓の森林を視察せんが爲めに徒歩縣道を辿る一望一帶の落葉樹林は二十年生位のものにして此の林内に設けられたる防火線は全國に模範たるものなりと追分の古驛過ぐ昔は小田原に於けると均しく人馬絡繹警蹕の聲一日も絶ゆるなく旅亭又甚だ壯大を極めたりしを參勤交代絶え鐵路一度開通してよりは旅客の此地を過ぐることに極めて稀に荒涼たる山中の一廢驛たるに至れり、御代田に再び乗車し田中上田篠井の諸驛を経て長野に着し藤屋本店へ投宿す時に六時半なり

六月三日 土曜、晴天
長野發歸校

善光寺參詣を終り十一時二十二分名古屋行列車にて飯枝の途に就く犀川の鐵橋を渡れば程なく川中島の古戰場を指呼すべし國亡びて山河あり城春にして草青みたる今に於て何ものをか存せる千曲川北に流れ鏡の影を展ふるも唯に鳥雀の噪ぐを見るのみ永祿の昔上杉武田の兩虎相争ひしより百餘年血痕苦蒸して花早く傾く姥捨驛に到る此地觀月に名ある地觀月堂を眼下に見る冠着の長き隧道を過ぎて程なく明科驛に來れば製材所に太き煙突夥しき材木の山積せるを見る松本鹽尻も東の間に過ぐれば宮の越驛に着す對岸德音寺に巴山吹の墓あり木曾公舊郷の地なり午後六時に福島に着せば一二年諸氏出迎へらる先生を初め生等の身上に微恙だになく此の度の行を了へたるを祝し且得る所莫大なるを喜びつゝ校門を入れば門前の松蔭縁に生等の飯來を運ぶるもの、如し

(完)

明治四十四年六月十四日第三種認可